

『安宅』と『撰待』 ―作り山伏をめぐる―

同志社女子大学教授 廣瀬 千紗子

見どころの多い曲は数々あるが、なかでも『安宅』の緊迫感
は格別である。「義経、頼朝、御仲不和にならせ給ふにより」、
北国へ落ち行く義経一行と、頼朝の命で一行を待ち受ける関
守が激しく対立し、子方が出て、立衆、狂言方の役割が重く、
登場人物が非常に多い。安宅の関で詮議にあい、かろうじて
通過したかに見えるも、またもや制止、そして再び脱出と、重なる
窮地を間一髪で切り抜ける。「数珠さらさらと押し揉」んで舞台
にひしめく山伏たちの凄み、丁々発止の山伏問答、架空の勧進
帳読み上げ、弁慶の主君打擲、さらには苦境の中で主従の恩愛
が吐露され、末尾を彩る延年の舞に至るまで、見どころの連続
である。すなわち、世阿弥の目指した〈幽玄〉の対極にある四
番目物で、劇的な能の到達点を示す、とされる所以である。

一曲を通じて、刻々と変化する局面を牽引しているのは〈作
り山伏〉という設定であろう。関所での詮議といい、南都東大
寺勧進の詐称といい、それが聞き入れられず、あげくには「定
めて勧進帳の御坐なきことは候まじ」と迫られての、まさかの
勧進帳読み上げも、すべては〈作り山伏〉であることによる。

富樫が〈名ノリ〉で、「判官殿十二人の作り山伏と成りて奥
へ御下りの由、頼朝聞こし召及ばれ、国々に新聞を立て、山伏
を堅く選び申せとの御事」だと告げると、まもなく一行は所与
の設定のように登場する。しかし、なぜ〈作り山伏〉なのか。

知られるとおり、本作のエピソードは、『義経記』巻七に散在
する。巻七は、頼朝の追及を逃れて奥州へと向かう一行を描く
が、そのなかの「三の口の関通り給ふ事」(詮議)、「平泉寺御
見物の事」(東大寺の勧進)、「如意の渡りにて義経を弁慶打ち
奉る事」(打擲)、「直江の津にて笈探されし事」(強力)という
道中の四話が、すべて安宅の関でおこった事件として集約され
ていることも、しばしば言及されるところである。その巻七の
第一話「判官北国落の事」は、出発前夜の衆議からはじまる。
義経探索の手勢は京都に及び、このところ「都には判官殿故に
人多く損じ」、「民の煩ひ出で来」というので、義経は「如何
にしても陸奥へ下らばやと思し召す」。衆議の末、義経と郎
党たちは、道は北陸道と定め、旅の姿は一案の「御出家」を退けて、
「山伏」と決する。それは「南都の勧修の御坊の、度々出家せよ
と教訓せられしを背きて、今、身の置所なきままに出家しけるよ
と聞こえん事、恥づかしき」(巻六)からである。勧修寺の御坊
は「東大寺の院主」当帝(今上天皇)の師僧という高位の僧で、
義経を親身に庇護し、亡き人々の菩提を弔うよう、出家を勧めた。
そのときは従わずに、今ごろになって自分が窮状にあるから出
家姿になるとは、あまりに身勝手な恥ずかしい。義経は、「この
度は如何にもして、様を変へずして(法体せず)に、下らばや」と
姿にこだわり、俗体の山伏に落着いたのである。幸いにして、

かつて義経は鞍馬山、常陸坊は三井寺、弁慶は比叡山西塔に居て、修験道に明るい。一行にとつて〈作り山伏〉とは故ある選択であり、『安宅』も、そのことを踏まえていると見てよいだろう。もつとも、北国に限らず、吉野山山中の記述にも詳しい『義経記』は、修験道に通じているとあれば〔岡見正雄〕、かたがた都合もよい。かくして『義経記』では、文治二年（一一八六）二月二日の暁に一行は都を出立するが、人数は十六人。『源平盛衰記』には十二人とある。『吾妻鏡』文治三年（一一八七）二月十日の条は、義経一行が妻室男女を伴い、山伏や児童に姿を変えて、奥州に赴いたという風説を留めている。

〈作り山伏〉たちは「如月の十日の夜」に都を出て、大津から琵琶湖を渡り、新関のことは何も知らずに、海津を経て安宅の湊に着く。ここで初めて「旅人の申しして通りつる事を聞いて、『安宅の湊に新関を立てて、山伏を堅く選ぶ』ことを知るのだが、「何と申ししても御姿隠れ御坐なく候間」、義経は強力姿となり、一行は「南都東大寺建立の為に」北陸道へ遣わされた客僧だと称して、関守に奉加を勧める。富樫の言い分は「勧めには参らふざるにて候、去ながら」山伏は通さない、というものである。勧進の客僧が山伏の場合には矛盾するが、ともかく「問答は無益」と山伏の真偽には立ち入らない。そうは言いながら、一行の勤行の後に勧進帳聴聞を求めるのは、たとえ「即身即仏の山伏を」討ちとめて、熊野権現の御罰を当たらむ事を恐れたのだとしても、富樫自身が東大寺再建に心を寄せていたからであるう。

平重衡による南都焼き討ちの翌年、養和元年（一一八一）八月、

「東大寺造宮勧進」の宣旨を賜った俊乗房重源は、十月に洛中を勧進して回り、頼朝もまた、元暦二年（一一八五）三月には「米一万石、砂金一千両、上絹一千疋」を奉加する。重源の尽力はさまざま、早くも文治元年（一一八五）八月、後白河法皇の臨幸のもとに、盛大なる大仏開眼供養を執行する運びとなった（以上、小林剛『俊乗房重源史料集成』、一九六五、奈良国立文化財研究所）。折りしも、義経北国落ちの直前である。以後も大仏殿、伽藍の再建など、大規模な勧進は続けられるので、北国の地にも客僧が訪れる信憑性は、大いにあったであろう。結果的に、東大寺勧進を称する弁慶の目論見は当たった。ただし、頼朝は大檀那であり、用材運搬についての支援もしている。やや後の記事ではあるが、文治五年（一一八九）閏四月八日に、鎌倉幕府の奥州追討が東大寺造宮の妨げにならぬよう、藤原経房をして源頼朝に教書を遣わさしむ、とあり〔玉葉〕『吾妻鏡』、小林前掲書）、同月三十日に義経は衣川に死す。いったい、新関と勧進の山伏とは、どう折り合いがつかのか、謎である。

ところで、頼朝が探索する一行の目印は、「十二人の作り山伏」であった。この「十二人の作り山伏」にことさら執着するのは、弁慶が佐藤継信の最期を語る四番目物、『撰待』である。一読、『撰待』の前半には「旅の衣は篠懸けの繰返し」露けき袖やしをるらん」ともかくも弁慶、はからひ候へ」「畏まつて候」「判官殿十二人の作り山伏となり、奥へ御下りと聞こえ候ほどに」「われ等を始め、皆皆子細なき山伏にて候へども、何と見申しても御姿隠れ御坐なく候間」「あら恨めしの憂き世や（繰返し）」と、『安宅』とほとんど同文が見出され、登場人物の多いことも

類似する。後半には「人の情けの盃を、涙と共に受けて持つ」の一文も現れる。つとに表章氏は、『撰待』と『安宅』には共通点が多いとされ、その後、西野春雄氏は、両曲の詞章と旋律に同じ箇所があることをもって、作者宮増説を示唆された。八島合戦譚以外には、本作には『安宅』ほど明白な典拠が見あたらず、信夫庄佐藤館が奥州への経路からはずれるのも、伝承の流入があるのだろう。作者の確証は十分ではないが、とにかく『撰待』の全編を通じて目立つのは、「十二人」もしくは「十二人の作り山伏」という語が頻出することである。それは九回に及ぶ。

「十二人の作り山伏」を待ち受ける者は、片や、それが職務の安宅の関守、片や、佐藤継信・忠信兄弟の老母である。老母は我が子の最期が「剛なる」か「不覚」なるか、その場にいた主君から直接に聞いて確かめるために、毎日山伏撰待を設けている。これもまた、形を変えた関所であろう。両曲ともに、待ち受ける者は、山伏一行の面体に確信がもてないが、真偽については、関守が「問答は無益、一人も通し申まじ」と、杜撰かつ強硬であるのに対して、老母は「十二人」という人数を頼りに相手を見極めようとする。安宅の関を逃れた後、佐藤館と知つて、避けては却って怪しまれようと立ち寄つた山伏こそ、今は追われる身となった主君の一行であった。これは『義経記』巻七で、ふた手に分かれて、わざわざ平泉寺の富樫館へと向かつた弁慶を思わせる。「山伏達は幾たり御着きありたるぞ」と、継信の遺児鶴若(子方)が家人に人数を問い、同様に老母も鶴若に人数を問う。ようやく十二人が訪れ、老母は「十二人はこれが初めて候」と喜ぶが、一行も慎重で、はぐらかされる。

このとき老母が弁慶に「まこと継信の母にてわたり候はば、定めて、判官殿の御内の人をば、知ろし召されぬ事は候まじ。そなたより名を指いて承り候べし」と試され、かつ、促されているのは、いうまでもなく勧進帳所望の反転である。老母は見事に、増尾十郎権守兼房、鷲尾十郎、弁慶と言いつて。さらには、鶴若も、「まこと継信が子ならば、主君判官と思しき者を選つて出し候へ」と促され、これまた「いかに包ませ給ふとも、人にはかされる御粧ひ、疑ひもなきわが君よ」と過たない。追われる一行も、待つ老母も、まさしく相手は予期した者たちであった。老母と鶴若は、弁慶による継信最期物語を聴聞し、あつぱれ継信は、八島の合戦で主君の身代わりとなつて相果て、忠信はただちに兄の仇を討つたことが、目の当たりに再現された。それにしても、と老母はいう。「御身代わりに立ちまゐらすること、今世後世の面目なり、さりながら」、もし「命長らえ御供申し、御笈をも肩にかけ、この座敷にあるならば、十二人の山伏の十三人も連なりて、唯今見ると思はば、いかがは嬉しがるべき」と。山伏はもう一人いたかもしれなかった。繰り返された「十二人の作り山伏」とは、十三人ならぬ十二人であり、継信の不在と裏腹であつたことを、ここに知る。

上演記録の初出は、『安宅』が寛正六年(一四六四)、『撰待』は同五年(一四六五)とされ、成立の前後関係は分らない。いずれにせよ両曲において、「十二人の作り山伏」という趣向は背中あわせであり、主従の危機を描く『安宅』の劇的緊迫感と、親子の逆縁を描く『撰待』の静かな緊張感が、対をなしているように思われるのである。